

第4回例会

日時： 7月9日（土）14：00～17：00

会場： 明治大学駿河台キャンパス（JR中央線御茶ノ水駅）研究棟（リバティタワー裏）4階、
第1会議室

報告： 木野 淳子（東京外国語大学・講）

「北へ向かったアメリカ人-イギリス系カナダの形成とアメリカ」

木村 和男（筑波大学）

「1846年オレゴン条約による米加国境確定の歴史的意義」

コメンテータ： 富田虎男（立教大学名誉教授）

高井 由香理（愛知県立大学）

司会： 橋川健竜（千葉大学）

共催： 日本カナダ学会関東地区研究会

明治大学人文科学研究所

要旨：

第4回例会「国境を問い直す——アメリカ・カナダ関係史再考」はカナダ学会関東支部および明治大学人文科学研究所との共催で、明治大学で行われた。第1報告者の木野淳子氏（東京外国語大学（講））は18世紀からアッパー・カナダの帰化法制定（1828年）までを対象に、のちにアメリカ合衆国になる地域からカナダにあたる各地域への人の移住を、領土の変動と重ねて紹介し、イギリス系カナダの形成にアメリカからの移民がもった重要性を強調した。第2報告者の木村和男氏（筑波大学）は、北部太平洋岸の米加国境確定（1846年）をめぐるアメリカ史側の研究史を整理し、日本・アメリカのいずれの研究においても、国境確定に影響を及ぼした勢力についての実証分析が不十分であると総括した。続いて19世紀前半にこの地域ではラッコ毛皮猟が盛んだったこと、毛皮をハワイ経由で中国に輸送して取引した勢力の一つはボストン商人だったこと、を紹介し、米加国境確定はむしろ太平洋史の枠組みで把握するべきであろうと提言した。コメンテーターの富田虎男氏（立教大学（名））は、国境線が先住民部族を一方向的に分断したこと、反乱首謀者たちの逃亡を可能にしたことを指摘し、高井由香理氏（愛知県立大学）は移民史の観点から国民国家論を踏まえ、なぜ米加国境は見えにくい国境線なのか整理した。出席者からは、メティスは国家内国家と見るべきか、国境画定の後にカナダ太平洋岸の植民地が設立された経緯は何か、18世紀・19世紀はじめのアメリカからの移民はアイデンティティをどう認識していたか、19世紀中ごろにかけてアメリカを脱してカナダに渡った黒人たちはカナダ史ではどう位置づけられるのか、など多方面におよぶ質問があった。18世紀・19世紀前半における北米社会の分断の性格と別個の政治文化の形成について、先住民と米加国境の関係について、また米加それぞれの一国史を超えた問題を設定し、分析枠組みを立ち上げる可能性について、多くの議論を今後にもち越したが、アメリカ史研究者には時間的・空間的により柔軟な発想が求められることが明らかになったことは、一つの大きな成果であった。